イースター墓前礼拝　Ⅰコリント 15：20～22

この受難週に最も感銘を受けた黙想の言葉を紹介します。

「われわれは神が何を約束し、何を成就されるかということを知るためには、くり返しくり返し、とても長い時間をかけ、そして静かに、イエスの生涯、言葉、行為、苦難、それに死を思いつつ、その中に沈潜していかなければならない。苦難の中にわれわれの喜びが、死の中にわれわれの生命が隠されていることは確かだし、すべてのことにおいて、自分たちがある交わりの中に立っており、それがわれわれを支えているということも確かなのだ。（村上伸訳）Dietrich Bonhoeffer『抵抗と信従』エバハルト・ベートゲへの手紙（1944 年 8 月）より」

ボンヘッファーはナチスによる支配が強まる中で、全く希望が見いだせない中で、静かに時間をかけて聖書の言葉に耳を澄ませたのでしょう。

私たちも、今年はなかなか希望が見いだせない中でのイースターの墓前礼拝となりました。イースターの早朝に墓前に集まるというのは私たちも弟子たちの足跡をたどり、聖書の物語をなぞり、深く深くその意味を問うことであろうと思います。福音書によれば、この場所から最も輝かしい福音は始まったのです。イースターの朝早く、マリアはここで泣いていました。声をかける人があります。「**なぜ泣いているのか？誰を捜しているのか？**」それはマリアが捜していたまさにその人、イエス様の声でした。たとえ、この世界にたった一人だと思えるようなことがあってもイエス様だけは一緒にいてくださいます。一人ぼっちの私たちを見つけ出して、傍らに立って語りかけてくださる。「**インマヌエル（恐れるな、私があなたと共にいる）**」「**あなたに平和があるように**」この一言で、私たちは復活に気づき、再び命が与えられるのです。復活とは、悲しみが喜びに、嘆きが歓喜の声に変えられること。今、世界中が最も必要としていることです。死者を弔う悲しみの場所は、イエスの復活を喜ぶ場所へと変えられたのです！先は全く見えませんが、けれどもいつか必ず暗闇が晴れる日が与えられます。その日を信じて、私たちは進みたいと願います。

4 月 12 日「なぜ泣いているのか？」ヨハネ福音書 20：1～18

イースターおめでとうございます！今日の日を皆さんと迎えられたことをうれしく思います。今日は例年のイースターとは全く様相が異なっています。礼拝は短縮、歌声がありません。聖餐式も出来ませんし、お祝いの愛餐会もありません。そして世界中の教会では、この日を喜びつつも共に教会に集まることができないでいます。歴史の中でもこれほど静かにイースターを迎えることは珍しいでしょう。

このような出来事を前にして「裁きだ！天罰だ！」とか「終末が近い」と不安を煽る向きもありますが、そんなことはあり得ません。神さまはわたしたちを愛しておられます。自然の災害や私たち人間には手に負えない出来事を含めて、神さまはこの世界を完璧に作られたのです。けれども、このことを通して、教会に投げかけられた問いは大きなものだと思います。「インマヌエル（私はあなたと共にいる）」という神さまとの最大の約束が与えられている教会にとって「共にいる」ことが赦されない事態はあまりに厳しく辛いものです。けれども、実際に「会う」ことだけが共にいる方法ではありません。昨年度の年間聖句「**あなたがたは皆、信仰によりキリスト・イエスに結ばれて神の子なのです**」私たちは信仰により結ばれた共同体だからです。共に神の慰めと導きを祈りたいと思います。

さて、聖書を見てみますと、今年の少人数での静寂に包まれたイースター、これは本来のイースターの姿かもしれないと思わされます。イースターの朝早くにマグダラのマリアとペトロともう一人の弟子が気づいたのはイエスが納められた墓が空っぽだったことでした！そしてペトロももう一人の弟子も失意のうちに家へと帰って行ってしまいます。その場に一人残された、マリアだけがただただ泣き崩れていたのです。愛するイエス様を十字架につけられ、失意と悲しみのどん底にあった弟子たちは、それに追い打ちをかけるようにその亡骸までも取り上げられたのです！イースターの朝は悲しみと嘆きの中から始まったのです。

一人取り残され、墓の前で泣き崩れるマリアに向かって語りかける者がありました。「**なぜ泣いているのか？誰を捜しているのか？**」マリアは園丁

が見回りにやってきたのだと思って言います。「**あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。**」すると、マリアが予想もしなかった声が聞こえてきました。「**マリア**」それは、まぎれもない、あの愛するイエス様の声だったのです。思わずすがりつくマリアにイエス様は言われます。「**わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と**」。マリアは弟子達のところへ走って「**私は主を見ました！**」と知らせに行きました。一人孤独のうちに嘆き悲しんでいたマリアが喜びの福音を走って伝える者へと変えられた、それがイースターの朝に起こった物語です。

この物語で「なぜ泣いているのか？」この言葉が気に留まりました。復活した主イエスが最初にかけられた言葉でした。なんでこんな当たり前のことを聞くのでしょう？墓で泣く人があれば理由は一つです。愛する人を失ったからです。今風に言えば、KY（空気の読めない）で見当違いな、酷い質問にも思えます。ところが、この言葉がすべてのきっかけとなります！イエスの復活はこの言葉から始まり、マリアは嘆き悲しむ者から喜びを伝える者へと変えられます。

「**なぜ泣いているのか？**」イエスがこう問われたのは、その答えを本当はマリアが知っていたはずだからでした。イエス様は十字架にかかる前に何度も死んで三日目に復活することを、弟子たちに知らせていたのでした。けれども、弟子たちの誰一人としてその真意がわかっていなかったのです。本当にイエスが死者の中から復活されることを。そして死に勝利されることも。

私たちには弟子たちの無理解を責めることはできません。なぜマリアが泣いていたのか？それは愛する人の死を遠くから眺めるしかできなかったからです。助けることも、遺体を丁寧に葬ることも適わなかったからです。それは今、世界中で悲しむ全ての人の姿でもあるようです。私たちはウイルスの感染を恐れながら、家に引きこもる日々です。この病の残酷な

ところは召された方の家族は、死の間際に立ち会うことさえ許されない、そういう点です。遺族に返されるのは骨となってからだそうです。こんな辛い病気があるでしょうか？そんな中でも保育園は通常営業です。生活のために止む無く働きに出かけなければならない人々が大勢います。この中にも不安を抱えた方はおられるでしょう。見えない先行きに希望を見出せずにいる方もおられるでしょう。「なぜ泣いているのか？」これは私たちも同じように問いかけられているのです。

けれども、今日の物語はそんな私たちに福音をくれます！イースターの朝、そんな現実が吹き飛ばされたのです！マリアはたった一人で弟子たちのところへ駆け出します。復活の知らせをもって！イースターに確かに起きたことは、イエスを見捨てて逃げ去ってしまった弟子達がもう一度元気を取り戻したことです！怯えて引きこもっていた弟子達が、なぜかやる気を取り戻して、福音を伝えに走り回る伝道者へと変えられたことです。そこには、「**あなたがたに平和があるように！**」そういって弟子たちの前に現れる復活のイエス様の力が働いています。聖霊の力が働いているのです。イースターの本質はそこにあります。絶望した人々が希望に満たされるようになるのです、悲しむ人が喜ぶ人へと変えられるのです。「**今泣いている人々は幸いである、あなたがたは笑うようになる（ルカ 6：21)**」今、世界中が待ち望んでいる福音がここにあります。私たちはそれを手にしているのです。

さあ、喜びの知らせをもって、今朝もこの場所から出ていきましょう。私たちは知っています。「**苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことがありません**（ローマ 5：3)」イースターおめでとうございます！イエス様の復活おめでとうございます！今、世界中の困難の中にある人達のために祈りを共にしましょう。